

フィエールマン

AJCC

12.5 - 11.5 - 12.7 - 12.6 - 12.9 - 12.8 - 12.4 - 11.7 - 11.8 - 10.9 - 11.9

前半 3F-後半 3F : 36.7-34.6

前半 5F-後半 5F : 62.2-58.7

当馬上り 3F : 34.0

前後半 3F で 2 秒以上のスローペースで、中盤もかなり緩んで前後半 5F で見ると 3 秒以上の超スローペースでの 1 戦。これをいつも通り中団で進めたレース。

超スローペースからなので仕掛け所は早くラスト 4F 目でまず 12.4-11.7 に 1 段階目の加速を踏んで、再度ラスト 2F で一気に加速する、ロンスパ適正とギアチェンジ性能が大きく問われた展開。

この展開は好調期のシャケトラが得意にしていた形で、これを差し切れなかった点はさほど評価を落とす必要はないように思います。

2 段階の加速には共にしっかり反応しているので、菊花賞で見せたギアチェンジ性能に関してはここでもいかに発揮されていました。

しかし、中盤で当馬が捲る動きなどなく、流れなりに進めた。つまり超スローペースの流れ通りに進めた割にはラスト 1F でラップを落としすぎたのは気になります。

菊花賞

12.8 - 11.9 - 12.5 - 12.9 - 12.6 - 12.4 - 13.3 - 13.0 - 12.8 - 12.7 - 12.8 - 12.2 - 12.2 - 10.7 - 11.3

前半 3F-後半 3F : 37.2-34.2

前半 5F-後半 5F : 62.7-59.2

当馬上り 3F : 33.9

長距離の菊花賞と言えども流石に緩み過ぎた超スローペースのレース。

これだけ緩めば中盤は関係ないと言えるレベルで距離適性はほぼ問われていない内容。超スローペースから仕掛け所もラスト 3F 目で未だ 12 秒台のかなり遅仕掛けの展開で完全な直線瞬発力勝負。

ラスト 2F にかけて 1.5 秒の加速でここで先頭との差を詰めていますし、これ以上の急加速に対応していたことになり、ギアチェンジ性能はかなり高いでしょう。

スローからの瞬発力勝負(ラスト 2F 最速戦)への対応力は高く、この武器は中距離でも同様に考えていいものです。

ラジオ NIKKEI 賞

12.2 - 10.4 - 11.6 - 12.1 - 12.4 - 12.3 - 11.9 - 11.6 - 11.6

前半 3F-後半 3F : 34.2-35.1

前半 5F-後半 5F : 58.7-59.8

当馬上り 3F : 34.4

1 秒近いハイペースで行われた 1 戦。中盤やや緩んでそこからのラスト 3F 戦。これを後方から進めて差し損ねての 2 着まででした。

当馬に求められたのはコーナー最速を捲って行ってという競馬。当馬に関してはラスト 3F はしっかり瞬発力を求められたことで、コーナー膨らむ結果になりました。その中からでも直線は大きく差を詰めて 2 着まで来ている後半要素は高く評価できます。

瞬発力、持続力ともに高いものを見せましたし、これはコーナー最速入れざるを得なかった中盤の運び方に問題があったという見方が妥当でしょう。

山藤賞

12.9 - 11.9 - 12.0 - 12.5 - 12.2 - 11.9 - 11.7 - 11.6 - 11.4

前半 3F-後半 3F : 36.8-34.7

前半 5F-後半 5F : 61.5-58.8

当馬上り 3F : 34.3

2 秒近いスローペースで後方から捲り気味にレースを展開して加速ラップ締めで勝利したレース。

ここで問われたのはロンスパ適正。ラスト 5F からポジションを押し上げているので、当馬だけで考えればラスト 5F 戦に近い競馬を行い、なおかつ加速ラップ締めという事で高いロンスパ適正を見せたといっているレースです

ここでは瞬発力どうこうではなく、このスローペースからのロンスパ戦への対応力を高く評価したいです。

まとめ

ハイペースのラジオ NIKKEI 賞、スローロンスパの山藤賞、極端なギアチェンジ性能を見せた菊花賞、これらがそれぞれ違うレース質を持っているのにも関わらず好走しているので、現状でタイプを限定するのは危険という所ではあると思います。

もちろんどの展開でも好走できているという事は、それだけ能力の絶対値が高いという事でもあるので、能力評価の底上げは大切です。

(ラジオ NIKKEI 賞、山藤賞、菊花賞のどれかが得意な展開ならば、同時にどれかが苦手な展開で好走したという風に考える事ができるので、それは能力で好走した事になる)

ただ AJCC は少しタイプを限定できる情報が入った様にも見えました。極端なスローペースからロンスパ+ギアチェンジ性能を問われた中で、ラスト 1F の落とし具合を見ると、ギアチェンジ性能とロンスパの両立までは難しいのではないか？という仮説が立ちます。

もちろん一気にギアを入れた上での坂は流石に苦しくなったという考え方もできますが、これの検証は次走以降でしていかななくてはなりません。

現時点ではこの仮説ありきの分析になりますが、結局それでも 2 着までは来てしまうので能力は間違いはないというのはほぼ確定でいいと思っています。

その中で注意したいのは、騎手がロンスパ、ギアチェンジどちらに寄せて騎乗するのか？という点です。AJCC のルメール騎手はあのスローペースで動かずに待ったので、間違いなく菊花賞で魅せた非凡なギアチェンジに寄せて騎乗をしました。

私的には、当面はギアチェンジに寄せて騎乗になるかなと思いますが、それでもどちらに寄せるでもなく中間的な脚の使い方もできるタイプなので、ルメール騎手であれば修正してくると思います。

結局の所、現状は能力高く後半要素も使い分けられるので、明確な危険要素は見当たりません。強いて挙げるならばラジオ NIKKEI 賞で見せたコーナリング。中盤で何とかできる要素でもあるので、大きな不安とまでは言えませんが、ハイペース×小回りで中盤押し上げそこな場合は危険ある。

ポイント

- ・バランスが良く、器用で崩れにくいタイプ
- ・ハイペース×小回りで差し損ねは要注意